

「読みきかせ」に関する考察

菅野 陽子

はじめに

（前文省略）

私が、「読みきかせ」というテーマを研究しようと思ったのは、電車の中で、隣りにちよこんと座っている我が子に、絵本を読んでも聞かせている母親と、それを幸せそうに聞き入っている子どもを目にしたからである。微笑ましいその光景は、疲れ切った私の心を癒してくれた。そのときは、その光景自体が癒してくれたのだと考えていたが、本当は、その光景に自分の幼児期を重ね合わせ、母の愛情を再認識していたから、心が安らぎ、そして癒されたのである。母が絵本をいつも読んでくれたことが、今になっても、私の心をあたためてくれたのである。つまり、「読みきかせ」はそのときだけではなく、大人になっても、そのよさが味わえるという、素晴らしいものである。

また、本とのかかわりは、幼児期の読みきかせからはじまるので、読書教育を考えるためにも、まず、読みきかせについての研究が必要だと思ったのである。

「読みきかせ」を研究するにあたり、まず、自分が読みきか

せを実践することが大切だと感じ、教育実習において、実際に読みきかせをおこなってみた。すると、クラスの子どもたちだけではなく、絵本を読みかせている私自身も、とても楽しいのである。これは、聞き手から読み手になって、はじめて気付いたことである。研究していく過程でわかったことはあるが、実は、読み手も楽しい、ということは、読みきかせを実践していく上で、非常に重要なことであるのだ。なぜなら、読み手の感情は、聞き手に無意識のうちに伝わっているからである。読み手と聞き手の感情が、絵本の楽しさと合い重なって、これから述べる「読みきかせ」のよさが、二倍にも三倍にもなっていくのである。

まず、第一章では、絵本がもたらす有効性と読みきかせとの関係を国語科教材『大きなかぶ』と絵本『おおきなかぶ』の比較から考えてみる。そして次に、第二章では、読みきかせの役割を、調査結果と実践例から検討していく。その上で、第三章では、読書教育として注目されている「読書のアニメーション」と、「読みきかせ」の比較融合をするともに、読書指導と読みきかせの関係について考えてみたい。

なお、一般に「読み聞かせ」というように、「きかせ」のところに「聞」という漢字をあてるのだが、私はあえて、漢字をあてずに、ひらがなのままにした。なぜなら、「きく」という言葉に、広がりを持たせたかったからである。「聞く」とは、自然に耳に聞こえてくる音声を耳で感じる意味で、「聴く」とは、意志をもって念入りに聞く意味である。ひらがなのままにすること

によって、どちらの意味も持つようにした。

聞き手が絵に集中しているときは、読み手の話を聞き手が耳で自然に感じとり、話をきくときは、意志をもって真剣に聞きとっている。読みきかせでは「聞く」と「聴く」とがうまく具合にはたらいっているのである。だから、どちらの漢字もあてはめたいのである。

第一章 絵本と読みきかせ

読みきかせには、絵本をつかう場合が多い。特に、幼児期ではその傾向が顕著である。それは、幼児期が言語能力の発達はまだ未熟なため、文字より絵が多い方が、子どもが本を楽しめるということである。確かにそのとおりではあるが、絵本がもたらす有効性のもっとあるのである。

ここで、国語科の教材と絵本の両方に取り扱われている「おおきなかぶ」を比較分析し、絵本がもたらす有効性と読みきかせについて論じてみたい。

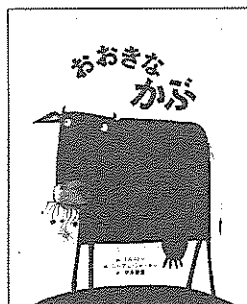
第一節 国語科教材『おおきなかぶ』

(教育出版教科書こく)1上

〈文体・語句について〉

国語科教材なので、手本となるような、正しい文章で書かれている。しかし、そのせいもあって、文全体に堅さを感じてしまう。

〈主題と内容について〉



みなで協力することの大切さを強調している。また、どんなに小さな力でも大切であり、必要なのだということを示している。それは、最後にねずみが協力することによって、ようやくかぶが抜けたことから考えられる。

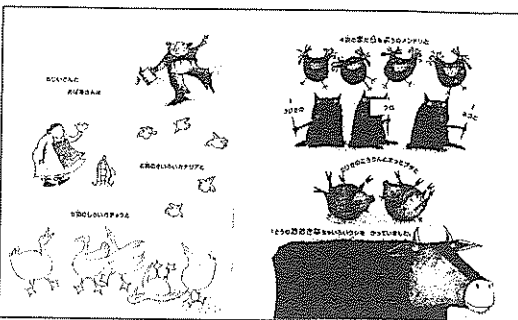
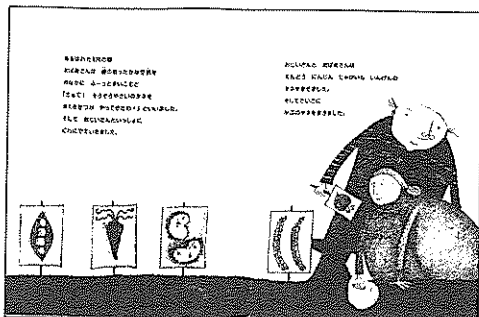
第二節 絵本『おおきなかぶ』
(トルストイ話、ニアム・シヤキー絵、中井貴恵訳、ブロンズ新社)

〈文体・語句について〉

教材となっている『おおきなかぶ』に脚色を加え、子どもたちが親しみやすいようにしてある。修飾語や擬音語を多用するとともに、文の配列、文字の大きさにも変化をつけている。

〈主題と内容について〉

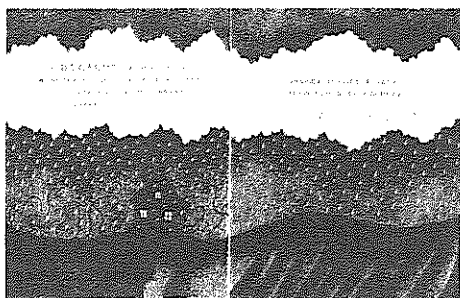
主題はやはり協力ではあるが、この話のねらいは、他にたくさんあるように思える。



まず、様々な教養を子どもたちに身に付けさせようというねらいがうかがえる。例えば、ネコとネズミ以外にもウシやブタなど、合計七種類もの動物を登場させていたり、動物の数を種類別に一つずつ減らしたりして数の概念を取り上げたりしている。さらに、1頭2匹、4羽というように、本文から動物の数え方も学ぶことができるであろう。また、色についてもふれている。次に、季節感をととても大切にしていることである。その証拠として、季節に関するところを、以下に書き出してみよう。

「あるはれた5月の朝 おばあさんは 春のあたたかな空気を……」
 「春の雨がふりました……」
 「春がすぎ 夏がくる……」
 「あるはれた9月の朝 おじいさんは 秋のひんやりとした空気を……」

これを読む子どもたちは、農作物の



できる過程を季節とともに理解できるであろう。

なお、これは、国語科教材「大きなかぶ」（以下、国語科教材の方を「大きなかぶ」、絵本の方を『おおきなかぶ』と表すこととする。）には、全くみられないことである。

そして、自然の大切さに気付いてほしいという願いも、この話には込められていると思う。

以前、こんな話を耳にしたことがある。天気予報キャスターが「明日は残念ながら全国的に雨です。」と発言したことに対し、テレビ局にクレーム電話がきたそう。クレームの内容は、雨は嫌なものではない、雨は恵みの雨であり、喜ぶべきものなのだ、というものだった。この話を聞いて、私は初めて、雨の大切さ、自然の大切さ、農家の人々の思いに気付いたのである。

『おおきなかぶ』で、おじいさんとおばあさんは雨音を聞いて、喜ぶのである。そして、そのあとこう続くのである。

「なぜなら雨は おいしいやさいをつくるための 天からのたいせつな おくりものだからです。」

この場面に会った子どもたちは、きっと雨が自然の恵みであることにハッと驚き、その後ずっとこのことが心に残るであらう。

第三節 絵本と読みきかせの関係

以上の分析結果に比較考察を加えながら、読みきかせに絵本を利用する意義について考えていこうと思う。

『大きなかぶ』はストーリーを明瞭かつ簡潔にまとめているので、児童達が工夫を凝らす余地が残されている。つまり、発展学習がしやすいことである。例えば、劇にする場合、本文のセリフ部分は7つしかないのも、もっとセリフを増やす必要があるし、さし絵も最低限度に抑えてあるので、場面設定をするためには、児童は否応なく、場面のイメージを膨らませねばならない。そこで重要になってくるのが、児童の想像力である。想像力があれば、話の場面を頭の中に思い浮かべることができ、それをもとに、劇をつくっていきるので、『大きなかぶ』は児童一人一人の中で無限に広がりを持つとともに、素晴らしい教材となりうるであらう。しかし、想像力の乏しい児童にとっては、無味乾燥な話に聞こえてしまうかもしれない。つまり、明瞭簡潔な物語や、さし絵の少ない本のおもしろさは、読み手の想像力にかかってくるのである。それに比べると『おおきなかぶ』の方は、想像力の乏しい児童でも、楽しく読むことができるだろう。なぜなら、読み手が話の情景を頭の中に浮かべ

すいように、絵が助けてくれるからである。また、本文にたくさん修飾語を使っていることも、想像の手助けとなっている。幼児期は想像力をどんどん培っていく時期だからこそ、子どもが想像するのを、絵本で援助してやるのである。そういったことで、絵本を読みきかせに使うのは非常に有効なのである。

第二章 読みきかせの役割

第一節 読みきかせの意義

大学生を対象に、読書についての調査（以下、「読書調査」と示す）をしたところ、就学前に家族から読みきかせをしてもらった人が23人中21人いた。つまり、ほとんどの人が、幼児期に親からの読みきかせをうけていたことになるのである。

では、読みきかせを我が子にする母親は、読みきかせにどのような意義目的があると考えているのだろうか。また、読みきかせの効果として何を期待しているのだろうか。そのことについて、こんな調査がなされている。それは、次の2つの質問し、その結果を、因子分析という統計的手法で分析したものである。

△質問▽

「何のためにお子さんに本を読んでいますか」
「本を読んであげることはお子さんにとって、どのような良いことがあると思いますか」

表1にもあるように、読みきかせの意義を、「文字・知識習得」と「空想・ふれあい」という二つに分類することができる。「文

表1 読み聞かせの意義

「文字・知識習得」 文章を読む力が育つ 文章を読む力を育てるため 文字を覚えさせるため 文字を覚えらるる 子どもに集中力をつけさせるため 集中力がつく 言葉をふやすため 言葉がふえる 日常生活に必要な知識を身につけさせるため 日常生活に必要な知識を身につく 話をする力がつく 子どもにとって必要な教養が身につく 「空想・ふれあい」 空想したり夢をもつことができる 子どもが空想したり夢をもてるようにするため 本を通して親子のふれあいができる 親子のふれあいを促すため 子どもが本の世界を楽しむため 身の回りへの新たな興味を持つことができる ものごとを深く考えるきっかけをあたえるため
注(読み聞かせの目的と利点の各々について回答してもらったため、類似の項目がふくまれている) 出典 秋田喜代美・無藤隆1996 幼児への読み聞かせに対する母親の考 えと読書環境に関する行動の検討「教育心理学研究」44、(1)

字・知識習得」は読み聞かせの結果として生まれる知的効果であり、「空想・ふれあい」は読み聞かせの過程で生じる思考や情緒を示すものである。では、読み聞かせの目的はどのような家庭も同じなのだろうか。この

調査では、「文字・知識習得」を重視する母親は二五%、「空想・ふれあい」を重視している母親は七五%いることが明らかになっている。つまり、読み聞かせの意義は、それぞれの家庭の教育方針や親の考え方によって、異なることがわかる。また、言語の発達促進や知識を習得させるために読み聞かせをするというよりは、子どもとのコミュニケーションをとるために読み聞かせをしている家庭が多いということもわかった。

第二節 意義の違いと読書環境の関係

では、読み聞かせの意義・目的の違いが、家庭の読書環境にどのような違いを及ぼすのかを考えてみたいと思う。

表2 絵本の読み聞かせ方

「会話型」 子どもと絵本を通して会話しながら読むようにしている 書かれている内容がわかるように絵などに説明を加えながら読むようにしている 本に出てくる物の名前を教えながら読んでいく あまり話しかけたりせず、書かれている文章をそのまま読むようにしている* 「一人読み促進型」 子どもが読めるところは、子どもに読ませながら読んでいく 字を教えながら読むようにしている 子どもが一人で本を見たり、自分で読んだ時にはほめるようにしている
*本項目は、逆の行動をたずねることで会話型の頻度を調べるのに用いた項目である 出典 秋田喜代美・無藤隆1996 幼児への読み聞かせに対する母親の考 えと読書環境に関する行動の検討「教育心理学研究」44、(1)

先程の調査では、「文字・知識習得」を重視する母親に比べて、「空想・ふれあい」を重視する母親は、我が子に読み聞かせをする時間が多く、頻度も高いことが明らかになっている。

「空想・ふれあい」重視の家庭ではほとんど行われていないのである。

これらの結果を自分なりにまとめてみると次のようになる。

読み聞かせの意義	読み聞かせの頻度	自宅の絵本の量	読み聞かせ方
A 文字・知識習得重視	少ない	Bよりは少ない	一人読み促進型
B 空想・ふれあい重視	多い	多い	会話型

第三節 読みきかせの時期（省略）

第三章 読みきかせと読書教育

第一節 読書のアニメーション

どうして、このようになるのだろうか。この論文の最初に少しふれたのだが、その理由として、読み手が子どもに学習してほしいと願いながら読みきかせを行ったりすると、聞き手である子ども側もそのようなことを察知してしまい、絵本本来のおもしろさを味わえなくなってしまうということが考えられる。『読み聞かせ—この素晴らしい世界—』（J・トレリース著、亀井よし子訳、高文研）という本はアメリカの教育危機の中で、高く評価されたベストセラーであるが、この中で「読み聞かせ」としてやってほしくないこととして、「あなた自身が楽しいと思わないものは、読まないこと。読み聞かせていくうちにあなた自身の嫌悪感があらわになり、せっかくの目的を頓挫させてしまう。」と述べられている。つまり、親の感情は読みきかせを通して、子どもに伝わるということなのである。だから、読みきかせをきっかけとして、子どもとのコミュニケーションをとろうと考えている「空想・ふれあい」重視の家庭では、結果より過程を大切にするので、必然的に親子の会話が増えてくる。そうになると、親も子どもも楽しい感情に満たされ、読みきかせの楽しさが分かるので、自然と読みきかせの頻度も高くなるし、絵本の量も多くなるのである。

私も実際、教育実習で小学二年生に心をこめて読みきかせをした際、児童はとても楽しそうに目を輝かせてきいてくれた。そして、読み終えた後、教室中が読みきかせた絵本の話題でいっぱいになったのである。その光景が忘れられず、私はまた読みきかせをしたい気持ちになったのである。結局、受け持たせて頂いた授業の中で、3回も児童と一緒に読みきかせを楽しむことができた。

読みきかせは、読み手と聞き手の信頼関係を確立するために、非常に有効な手段である。しかし、読みきかせは、その場でじっと読み手の声に、耳を傾けていなければならないという欠点がある。読書調査の読みきかせの感想の欄に「じっとして聞くのが嫌でした」と書いた大学生がいた。この大学生は就学前から読書が嫌いであつたという。また、教育実習で読みきかせを実践したとき、私の周囲に集まらず、自分の机で違うことをする児童が数名存在した。これらのことから分かれるとおり、飽きやすい子どもや、誰かに本を読んでもらうことが嫌いな子どもへの読みきかせは難しいであろう。そして、読書嫌いを生んでしまう可能性を秘めている。

最近、「読書のアニメーション」が読書指導の方法として注目をあびている。

アニメーションとは、ラテン語のアニメ（*anima*）＝魂、生命を原義としており、いのちを生き生きと躍動させること意味している。

日本で初めて「アニメーション」を紹介した文献は、『世界の公共図書館』（埜上衛編著、全国学校図書館協議会、一九八六年八月二〇日刊）である。その中で、アニメーションは、フランスの公共図書館で行われている文化活動の呼称であり、図書館の活性化を目的としていると述べられている。また、『ゆとり・楽しみ・アニメーション』（増山均著、労働旬報社）には、豊かな子育て

てのためには仲間と一緒に楽しみ、共に楽しむなかで育つというアニメシオンが必要である。魂をイキイキ、ワクワクさせながら活動することによって人間は豊かになると述べられている。

一九七五年、スペインのモンセラット・サルト氏は、本を読まない子どもたちに本の魅力を伝え、読書の楽しさ、おもしろさを伝えたいと考え、アニメシオンの手法を読書に取り入れたのである。

「読書のアニメシオン」を簡潔に説明すると、本を媒介にしてゲームを楽しむという読書指導の一つであるといえる。「読書で遊ぼうアニメシオン」(モンセラット・サルト著、佐藤美智代・青柳啓子訳、柏書房)には作戦と呼ばれるゲームが25個紹介されている。その中から、アニメーター(読み手の呼称。本によってはアニメードールともいう)がいくつか選択し、行つのである。

作戦1 「タウトをさがせ」

アニメーターの読み間違いを言い当てるゲーム

作戦2 「これ、だれのもの?」

持ち物の絵を見て登場人物を当ててるゲーム

作戦3 「いつ?どこで?」

時間と場所についての質問に答えるゲーム

(中略)

作戦12

「物語バラバラ事件」

(中略)

作戦25

「史上最大のクイズ作戦」

チームに分かれ、本に関する問題を出しあう大人数のクイズゲーム大会

では、実際に教育現場で「読書のアニメシオン」はどのように実践されているのであろうか。週刊誌「AERA」(一九九九年九月六日号)の「学級崩壊怖くない」という特集に岩辺泰史先生(葛飾区立飯塚小学校)が「モンシロチョウの生態を解説した科学読み物の読み取り」という国語の授業でアニメシオンを取り入れた様子が紹介されていた。

「では、クイズ大作戦をはじめます。」

この日、岩辺先生が最初にこう宣言したら、あとは子供達のペースになった。

一番目の班の女の子が画用紙を手持って、みんなに聞いた。「モンシロチョウの花を見つける方法を知るために、二回目の実験に使った物をなんですか?」

教材の文章は、花の形、におい、色などのうち、どれかを手がかりにモンシロチョウが花を判別するか実験している。

「プラスチックの造花です。」

ある班が答えた。正解かな、と思ったが、すぐに子供達は、「ブー」

「ちよっとちがうよ。」

そう言い合って、また挙手をする。

「においのしないプラスチックの花。」

これが正解だ。岩辺さんは黒板で、正解した班に点数を加えた。

(作戦4、11、13、24の参考資料省略)

「読書のアニメシオン」は読書活動というよりは、遊びといっ

た方が正しいような気がする。しかし、活動内容を検討していくと、遊びだけではなく、国語科教育的活動がしっかり盛り込まれていることが分かる。「読書のアニメーション」の一般的な流れは次のようである。

(1) 本を読ませる活動（一人読書を促す活動）

事前に「本」を読んできてもらう。

(2) 話の内容を理解させる活動

「ダウトをさがせ」

アニメーターの話をよく聞かないと分からないので、話を聞く訓練にもなる。

「物語バラバラ事件」

順不同の文章や場面をあらわす絵を話の筋通りに並び直すので、ストーリーを理解できる。また、並び直した後、場面の絵について子どもに説明をさせれば、「話すこと」つまり、表現する力がつくであろう。

他に

「いつ、どこで？」など

(3) 登場人物になって考える活動

「この人いitかな？いitなかったかな？」

「これ、だれのもの？」など

(4) 感想を交流する活動

「史上最大のクイズ作戦」

「ぼくのタイトル、世界」

読んだ本にタイトルをつけることによって、本から得た

感動を表現できたり、物語の主題として捉えたことを表現することができると。

「今日から書評家」

本について感動したことや良かったところを発表し合って、発表したことを評価し合う

この流れは、まず、教科書の本文を精読し、次に内容把握をし、さらに、人物の心情について考える。そして、最後に感想を発表したり、書いたりするという一般的な国語科の授業と、変わらないと思うが、「読書のアニメーション」は一般的な国語科の授業より、「話すこと」つまり対話に重点を置いている。自己表現することは、自分自身を見つめなければいけないことであるし、対話をとおして、互いの気持ちや心を交流させることは、豊かな人間性を身に付ける上で非常に重要であると思う。ゲーム感覚で本とふれあうことができ、そして、友人との交流を図れるという点は「読書のアニメーション」の優れているところであろう。

しかし、本は遊び道具なのだろうか。本を楽しむ、本を味わうということは、本の内容自体に感動したり、考えさせられたりすることなのだと思う。そういった読書本来の醍醐味を「読書のアニメーション」は軽視しているように思える。

どんなものにも、長所もあれば必ず短所もある。そのことを肝に銘じて、実践していくことがとても大切だと思う。

第二節 読みかせとの融合

「読みかせ」も「読書のアニメーション」もそれぞれに長所があるが、そのかわり短所もある。そこで、この2つの長所を生かすとともに、短所を補いあえるように考慮し、融合させたらよいのでは、と考えた。今回は国語科授業の一環としての融合案を提示したい。

「読みかせ」と「読書のアニメーション」の融合案

1. 設定学年 第1学年

2. 教材名

「おてがみ」(アーノルド・ローベル作、三木卓訳 光村図書教科書こくご1下、所収)

副教材名

「なくしたボタン」

(アーノルド・ローベル作、三木卓訳『ふたりはともだち』文化出版局、所収)

3. 融合設定の過程

融合を考案するために、まず、「読みかせ」と「読書のアニメーション」の原則を整理した。

「読みかせ」

・聞き手と読み手はなるべく近づく。

〔親近感があるし、絵がよく見え、話を聞きやすいから。〕

・低学年には絵本を多用した方がよい。

・子どもの興味に応じておこなう。強制はしない。

・感想を読み手から求めない。

〔読書のアニメーション〕

・自由参加が鉄則。

・事前に本を読んでおく。
・作戦(ゲーム)をつかう。
・「沈黙」も大切。

〔遊び感覚でするのだが、あまりに騒ぎすぎると効果を失ってしまう。〕

・教科書中の作品は意識的に避けられている

これらの原則をできるだけだけ生かそうと考えていた。最初に持ちあがった問題はどの作品を使うのかということであった。国語科の授業なので、教科書から離れる案はできるかぎり作成したくない。そこで、「おてがみ」の学習の発展・まとめとして、この話が収録されている「ふたりはともだち」から、「なくしたボタン」という作品を融合案に使うことにした。そうすることによって、児童の興味を引くことができるし、教科書で取り扱っている作品を学習した後、同じ作者が書いた違う作品を読もうとする意欲づくりへのきっかけにもなるだろう。また、融合案を発展・まとめにもってくることで、児童は勉強的意識よりは補足的・遊戯的意識が強くなるため、のびのびと活動することができるのではないかと考えた。

4. 融合目的

- ① 読書嫌いや、読みかせをじっと聞いていられない児童に、本の楽しさに出会う機会を与える。
- ② 教師と児童の心の距離を縮める。
- ③ 本の内容を味わう。
- ④ 表現する力をつける。
- ⑤ 対話をおして、友達の気持ちや考えを知る。
- ⑥ 本の内容を理解する力を養う。

5. 展開	導入	展開	まとめ
<p>学習活動(☆読みきかせ★アニメーション)</p> <p>1. 前時の学習の確認 T. この前はなんとというお話の勉強をしたのかな C. おてがみです。 T. そのお話について知ってることを何でもいいから教えて下さい。 C. は作者名、登場人物、話のあらすじなどを答える。</p>	<p>2. ☆「なくしたボタン」の読みきかせ T. みんな沢山勉強できたね。今日はね、そんなみんなのために先生が、かえるくんとがまくんが出てくる面白いお話をご紹介します。 → 読みきかせ ★「ダウトをさがせ」をする 〈ダウト箇所〉 かえるくん↓ひきがえるくん ボタン↓ポケット すずめ↓はと あらいくま↓りす うわぎ↓ズボン 黒板にバラバラに貼られたさし絵を物語の順番に並べ替える。</p>	<p>3. ☆「ダウトをさがせ」をする → 読みきかせ ★「ダウトをさがせ」をする 〈ダウト箇所〉 かえるくん↓ひきがえるくん ボタン↓ポケット すずめ↓はと あらいくま↓りす うわぎ↓ズボン 黒板にバラバラに貼られたさし絵を物語の順番に並べ替える。</p>	<p>4. ☆「物語バラバラ事件」をする 黒板にバラバラに貼られたさし絵を物語の順番に並べ替える。</p>
教師の支援	<p>・ ゆっくりと、心を込めて読んでやる。 ・ 児童の意見を板書する</p>	<p>・ 机を下げさせ、前に集まらせる。 ・ 話に飽きさせないように児童の様子をうかがいながら読む。</p>	<p>・ さし絵がどんな場面なのかをきくようにする ・ 思ったこと、感じたことを自由に発言できる環境づくりをする。</p>

活動内容は少ないように思えるが、設定が一年生であるということと、四五分授業であるということとを、考慮すればこのような融合案が適切ではないかと思う。

また、内容分析が一番のねらいではないので、登場人物に関わる作戦は外した。そして、「読書のアニメーション」における、感想交流のための作戦(例えば、「ぼくのタイトル世界」なども取り上げなかった。なぜなら、これらの作戦は感想を無理強いしてしまうおそれがあるし、私は、感想をゲームの道具として捉えることに賛同しないからである。感想というものは、話に心が揺さぶられなければならない出てこないものである。そして、これはキラリと光る宝物なのである。だから、私は大切にしたいのである。

しかし、そうすると、「読書のアニメーション」が重視している「対話」の姿が消されてしまい、融合を試みた意味がなくなってしまう。そこで、意見交流の活動を、融合案に取り入れたのである。友達どうして長所を見つけあうことは、互いを尊重しあうこと、さらには、豊かな人格を形成していくことに、つながっていくと思う。その土台づくりとして、「なくしたボタン」の話のいいところを見つけようという発問にした。また、友達の見解をきくことによって、この話をいろいろな角度から見つめることができるだろう。

そして、最後に本格的ではないが、ブックトークを盛り込んだ。これは読書調査の結果に基づいている。「おもしろい本の話」を先生や友人から聞きたいと思いませんか」という質問に、「思う」

(少し思うも含む)と答えた人が23人中19人もいたのである。これは多くの人が本の紹介をのぞんでいるということを意味している。ブックトークが読書への道しるべとなることを祈って融合案で取り上げた。

この案は、あくまでも案であり、実践をともなっていない。教育現場に立ったとき、実践したいと切に願う。

第三節 読書指導との関係論

子どもたちの本との出会いは、「読みきかせ」にはじまる。そして成長し、いつの頃からか、自ら読書をするようになっていく。「読みきかせ」と「読書」は深いつながりがあるのだろうか。

一般的に述べれば、「読みきかせ」は「聞く」ものである。つまり、受動的な活動である。一方、「読書」は一人で「読む」ものであり、能動的な活動である。このような観点からすれば、「読みきかせ」と「読書」は正反対のものと考えられる。となれば、「本」を媒介にしていること以外は、二者はつながりを持たないという結論に達する。

しかし、水野小夜子先生の読みきかせ実践例を拝見すると、二者がつながりを持っていると考えざるを得ない。水野先生が読みきかせた本を、自ら探し求め、先読みしてしまう児童の存在。読みきかせの後、教室内で本の話題が増えること。そして、この学級の学校図書館での本の貸出数が、他の学級より多いこと。これらは、二者のつながりの裏付けとなるであろう。

実は、「読みきかせ」は決して受動的な活動ではないのだ。子

どもにせがまれたことが契機となり、親が読みきかせをする場合が多いのである。子どもが本棚から絵本を引っ張り出さずして、「ねえ、ねえ、これ読んで!」と母親に読みきかせをせがむ光景を、病院の待合室でよく見かけるだろう。子どもは自分の意志で本を選んでいるのだ。親に読みきかせをねだるのは、絵本の内容を知りたいという好奇心と、親が自分のために読んでくれる、ということから自分への愛情を確認しているためであろう。また、読みきかせの最中も子どもは、じっと母親(読み手)の声に、耳を傾けているだけではなく、絵の語りかけを読み取ってものがあるのだ。だから、読みきかせ中の親子の会話は、絵に関することが多い。

だが、「読みきかせ」と「読書」が深い関係にあるかどうかという答えを見つけるには、もっと研究を重ねなければいけないであろう。

ただ一つ、この研究ではっきり言えることは、「読みきかせ」が「読書」のきっかけづくりになっているということである。読書調査では、読書が嫌いな人も読みきかせをしてもらった経験があるし、逆に、読書が好きな人で読みきかせを体験したことがない人もいた。水野先生の実践例の場合は、読みきかせを毎日行うことで、物語の世界に興味を持つ児童が多くなったのであろう。

「読書指導」は読書の世界を児童に紹介し、そのおもしろさを体験してもらうことが重要だと考える。そう考えると、「読みきかせ」は「読書指導」における、読書の世界を紹介する方法の

ひとつとして関係づけることができるのではないか。

そして、読書だけではなく、算数、社会、音楽など、どの教科指導も同じように、児童にさまざまな文化や知識を紹介し、体験させるためにあるのではないかと思う。児童はさまざまな体験をし、自分自身でやりたいことを選択していくのである。そして、これが、これから児童が身に付けていかなければならない「生きる力」の原動力となるであろう。

おわりに

数年前、伊豆大島へ出かけた際に、ひよんなことからある陶芸家のもとで陶芸体験をすることになった。その方は陶芸のことだけではなく、教師になる上でもとてもためになることを話してくださったが、作品が何色に焼き上がるかをたずねたとき「色は何色になるか私にも分かりません。焼くときの温度や状況などによって焼き上がりの方が異なるのです。」とおっしゃった。そのとき、私は焼き上がりに無限の広がりがあるからこそ、陶芸はおもしろいのではないのかと思った。また、このことは、絵画、音楽、運動、そして人間にも当てはまることだと思う。無限の色彩、音のハーモニー、動き、そして、様々な人格。金子みすゞ氏の言葉を借りれば、「みんなちがって みんないい」ということである。

想像力でも同じことがいえると思う。想像力は一人一人ちがっているし、無限の可能性と広がりをもっている。だから、絵本や物語（たとえフィクションであれ）を読んだとき、一人一

人の感じ方や思い、感動はそれぞれがったものになるのだ。それを、交流し、共有できるのが「読みきかせ」なのではないのだろうか。母と子が本の感動、そして、時間を共有することが、互いの信頼関係を築く源になっているのだと確信する。（中略）
また、絵本の世界をとおして、今までに体験したことのない世界や夢の世界を、子どもたちはなんとなく自分なりに思い浮かべ、本の中で疑似体験をすることもできるのである。この疑似体験も、「読みきかせ」によって味わうことができる楽しさであり、感性に揺さぶりをかけるものではないのだろうか。

「読みきかせ」によって、子どもは様々なことを感じ、考えていく。そして、豊かな感受性、人間性を身に付けていくのだと思う。母が子に読みきかせをするように、私も教壇に立ち、児童に読みきかせをしたいと思う。そして、児童と私のあたにかい信頼関係を築いていきたいと思う。

文献・参考資料（略）